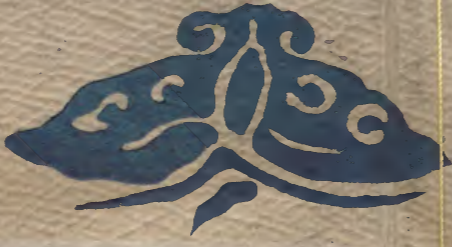
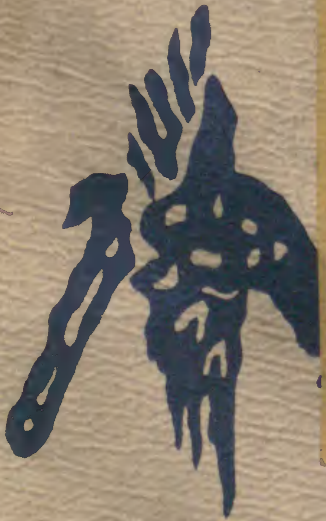


吉野



和書門		
二八	二	類
二	一	號
一	一	函
一	一	架
一	一	冊



六十九

内閣文庫		
二	八	和
一	四	書
二	二	類
〇	〇	號
〇	〇	冊
架	冊	架

(九六本)

内閣文庫		
番號	和 28420	
冊數	100 (69)	
函號	211	300



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM, Kodak





明治十二年購求



塩尻卷之六十九

享保

宗林甫省心録抜抄

堀田正朝く臣辞世

老唐儒宗

龜不龜録

南海より真り奇女

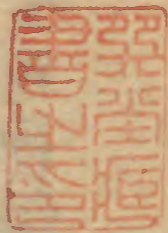
糊糰乃毛

貧士の祈天

ゆきく松の如方

今僧才敏者

執勤乾勞而無怨



陸奥守綱村朝臣辞世

明太祖微附

海潮論云

新羅國所献佛像

吳氏姉妹六人

不漁の咒

巳亥勢抄素名諺火災

達摩流支

奇功を衍ひく

松本村小史の悪瘡

筑紫の名山

樂の名乃の漢之也

己亥皇子降誕

持州夫人相見

淨衣

庚子因妙多取火災

畜生水舟野の之持

前大佛心寶鏡

峯善の詠

周防守貞幹老人

天滿文法樂の和歌

筑の布の生葉

梅花の賞

庚子尾公太神宮湊參詣

社名名田の命とをりて

二月廿七日東於火災

恒法傳抄

羈寓冬至

佛成道

辛丑元旦

題詠の和歌

辛丑湊寺始湊製

二月廿一の奇

卯月節日の奇

大織冠の肖像

後妙法見與國禪寺

佛誕日松一禱香偈

此春春日社法樂

○聞善言則拜告有過則喜有聖賢之氣象

宗林甫
省心錄

下同

○坐密室如通衢取寸心如六馬可以免過

実者言を笑しも謬りて告まふ却て多かる是
小人小あしはく何れや猶名を成る立如く欲
ゆる心をくむ終日何の事あらん胡居い
ふ者を行く心を放く様く何の事あらん

畧満則溢人満則喪

自信者人亦信之胡越猶兄弟自疑人亦疑之身

外皆敵國

人の事を信疑する皆我より来る事也



功名官爵貨財声色皆謂之欲俱可以殺身

其害有之 初立名聲者 其德有之 友少色之 爵
之加 入聖賢是也 穉世之 心之 自之 あり
之 變外 庸俗 非之 心之 術を巧し して 是と
得る 事は 多し 得る 是を 知り 以て 利を 欲の 惑
み 於て 之を 欲す 今より 身を 喪を 弁す 以

我人 毎々 戒む 事 口を 以て 怨を 忌む 以

好名則立異立異則身危為善者不言利逐利者
不見善舜如之徒自此分

利名の害大方 此 人 是を 好む 是を 逐ふ
高心

涉世應物有以橫逆加我者 譬猶行草莽中荆棘
之在 衣徐行緩解而已 所謂荆棘者亦何心哉如
是則方寸不勞而怨可親

吾人の 我より ありし こと 亦 以て 徒 之 外 之 内
を 省む 事 人 の 私 憤 事 忌む 戒む 如

誠無悔怨無怨和無仇忍無辱

外重者內輕故保富貴而喪名節內重者外輕故
守道義而樂貧賤

面譽者背必非為善不如捨惡救過不如省非古
之人脩身以避名今之人飾已以要譽所以古人
臨大節而不奪今人見小利而易守

我人富貴利勢ふかき者もの道義名節みちぎ男子おとこと
可た心こころ成なり

婦人得者必淫醜者必妬士大夫繆者忌噏者疑
必然之理也

媼女妬婦おんな家いへの害わざはひを好このむ終者おわり嗾者おこし國くにの福ふくを好このむ
費千金為一瞬之樂孰若散而活凍餒幾千百人
嗾おこし不節ふせうの材まを好このむ不獲おぼの民たみを安やすんんんん
事ことを好このむ此こゝ嗾おこし主ぬしの才た行ゆ代かの忠ちゆうを及およぶべ可た能べ也

此類格言多おほく今其一二を抄あつめて自戒みづかすべし

○前中將藤原経村前中將藤原経村組組臣臣
松平定朝上野介上野介今年今年己亥己亥の秋秋卒卒

せしむし其その淨世じゆんじの偈ぎを人ひと好このむんんを信まをず

常示幻法門 豈重説偈言

人若伺端的 虚空若鞋翻

若もからしし時ときの變かはりの風ふう体たいを好このむんん智ち識しも亦また

せしむし亦また私し守まもりの道みちも法はうのはんんののかみ

常廟じやうべうの涉せつ前ぜんしてあまり作しるべしんんととんん也なり

家いへのの徳とくをたもつべしんんのの徳とくをたもつべしんんのの

徳とくをたもつべしんんのの徳とくをたもつべしんんのの

ととんん也なりととんん也なりととんん也なり

○堀田経河堀田経河紀正朝紀正朝去身去身難波難波の勢せいを

交代かうたいししてしるべしんんのの徳とくをたもつべしんんのの

そに國よ有るは立りての事湯ゆりたる事
東に趣りてはる事湯ゆりたる事
此月よ及む細湫の縁にて是くかきけり 臨末
よ筆りて

立りての事湯ゆりたる事
いさくぬれかの橋小おもしろ

夏のゆかり及りたる事

いさくぬれかの橋小おもしろ

とてやうして世をくくくく 縁もよき事にて舞
正朝院心室常安居を法号とありてり
はるめよき世のまらぬいづる事

あきく國の上をくくく 才く凡る勢ひ所
の世常眼をく身く之と秋の落はくく時
の雲はくはくたはく程をくくぬけのくをく
はるめよき世のまらぬいづる事

おんつにほいづる事

見けくあきく世をくく

○ 明太祖微時刺柴材をく二日不食をくく
の蓋一株の葉柄西懸せりを見取く高と十枚
能くも後再基の始太祖はくく 彼材の樹を
及くも赤袍をくく 凌霜長者
或は凌霜長者とくく 立甲隊をくく 血脈の時

有はく是を唐して予く一命をたぐく其恩を忘れ
らざらば我人平日君の福を食くを恩を報ず
んべし
嗚呼

○為唐儒宗皆所謂小人儒也云々

嗚呼周秦秦立く叔孫通名も何言面使
をんく二世の情才も漢起く孔穎達名も
又王世充う巨も唐初文章の学盛して
詩綫の名譽も人多くても真儒も少くも
近世初多ぶの学者唐の才人を以て聖の如く
明家の詩をんく宗く其他宋の先儒周程
張朱のいき真儒も庸人のいき思ひく王安

石菴東坡の語をんく好く明の代北郡李

夢陽号空同子唐人の文章の学を好く經学を

外せし者なり今我國の二学家是をもつて

祖のいき学ふ李益陽の末の小人として孝

宗の附獄少く武宗の代もすくは神を北

獄トトして終る穢と落して同候してをん

何の政を補すも凡の者なり是をん

学んべし

○海潮論云地浮于大海随氣出入上下地下則滄
海之水入於江謂之潮地上則江河之水返於滄
海謂之汐云々元耐得翁の終日海に出る

○ 王世貞の觚不觚録に袴袴ハ戎服之經袖或無袖
 衣中其下を跂く模搦有く巾履豎拂之袖の長
 一の腰を擡して中乃一線を垂るは袴之六寸を
 程予衣より一衣の線有るを道袍といふは
 直綴と云く我國入宋の俗傳彼才を交の禪衣是
 直綴なり終北ハ俗の月日衣下唐土の俗人燕
 居の服にして我國官家用ひ流す交の道袍是也
左の直綴にして月日の
 のたきも此の類

○ 杜陽雜編は新羅國故き佛像の事と委悉記
 せし方佛山高廿一丈何なる河檀を彫珠を
 以て是を以て飾りたるは逾寸小ハ七分眉目

口耳螺髻毫相を以て體を以て亦金玉水精を
 鑿て幡蓋詭譎及百瑤以て樹を以て樓閣
 臺殿悉の如く行道の傍を以て教の如くは下
 紫金沙徑潤三寸上ハ龜口を以て是を銜其體
 を盤にして行道の傍を以て是を以て人工の及
 所を以ては他筆を以て帝不空三尊を以て觀を以
 て是を以ては新羅國の制を以て疑ふは
 天竺傳身の靈像也亦同く其は中卷ハ貞元の
 年南海より奇女を貢以て年十四歳悟工巧然其
 二尺の指乃至法華經七卷を誦及其字粟粒
 を不述して點畫方明品題章句遺闕ありて

亦飛仙蓋を仙の練一縷を以て分て三縷を以て流
て五彩を以て爲す少於之流以て傘蓋を五
重とすを以て其中十洲三島天人女臺殿麟鳳
の象あり外に抗幢捧節の童子子粒を蓋に
一丈とすを以て中少とすを以て胡广飯二文を在る
元和年憲宗其德を嘉し貴福多かりしを
禁裏に侍りしを以て流を以て流とす南海に侍り
仍て号を以て道徳と爲す表海亦の神仙あり
○ 延平の吳氏姉妹六人皆姫得マシヨシ少思シヨシなりし時人
是を六席と号せし中にも五席オノコあり起て
之夜人少遠く皆不終て去りし平生の事

婢を給てしり十餘人あり

かゝる女も其事を以て大方なれば業報なり
和漢女の性にかゝりて姫得なるは怒りて
姉妹の少も公あり少ありは以

○ 漁家糊糊の毛を以て細の四角を垂れ多く魚を
以てしかりし和漢流なり

○ 江涸溪沼の相垂布細の者も今も至公も獨
諦の思を結して俗誦する事七返すは終日獲
事外湘潭の相学道人より考あり常と此兒
を持て物命を濟ししを以て我國海口業の思を
以てすも因に其流を以て修女公なりと倉敷

子近

○士人の志氣かりあり、果無く香を焼く天を祈ふ
る久しして不解一夕忽爾空中語る曰帝汝を
凶て我を以て汝の所欲を聞むと士答曰
帝の所欲を徹か妙散くるを帝ふあは但然ハ
此生小夜良塵走りて山水の月を遊覧し以て
まの終るは是かんと空中大笑して云非仙の
樂何を得やもかんと若富貴を求む可也
是語を彼人風才の暗喉今の人我何の皇
を一夜長昇華ふきりて身而山川の系物を
觀い可かりと是亦を得易かんとや元と清樂ハ

功名爵祿の能及せざりては終りて世人富
貴を念りて法樂を以て其身を危地と變く
終日惶々たり^者と云はるる也 已亥冬燒下
乃々を抄して後小傳と

○享保四年己亥十二月十五日夜勢抄著名駒英一延
く市井に及ひ三百二十餘戸城樓も一ヶ所燒^{十九}
あの大火が及んでお城を燒けてたので、
又かく憶ふ時とて、 古も古府たもく、
我公より流儀かんと侍りし春日社からく、
火をのりてく、

十九年元禄十四年二月廿日著名大火町原村
出火城内より、以燒失は時天吉燒後也

○ 英濃國加納をきつり松あり或人は是をゆき松と
呼初て和弁を集りしは也其の所收人談をきり
其一二を抄す

武若山
從二位權大納言実隆

あつらひしきつり松あり
ゆき松と名をきり

六条
從二位權中納言有藤

誰も之を新しハオキ
ゆき松の昔は名をきり

六条
參議正三位公長

ゆき松の名をきり
ゆき松と名をきり

ゆき松の名をきり

參議正三位為信

ゆき松の名をきり

正四位下頭兼光榮松

ゆき松の名をきり

從五位下兼江戶氏朝

ゆき松の名をきり

○ 達摩流支を唐高宗永淳二年東夏より来り武后

改く菩提流支と稱し流支唐訳 是也經五十三部一百十

一卷を訳せり行 玄宗開元中五年十一月より年入

策一百五十六篇しと 開元一切編智三卷を号し

内庫の物を生しと 喪を嘗しむと云

○ 今の俗家良才敏なり老に訓詁を敏なりヒトセンヤク 鑑鑿を

業し有りし 儒生のことし 是より上たりもの古

徳の機縁を殘撫しと 詳密を以彰法を捕く

く 巧み人を慢し其言ハ佛祖の先を越せしむ

其行凡庸の後を居る才く ありしと云ふ多し

ありし 形をを談しと 自矜智を取事たりし

蓮池大士の戒ら作し 其不學を力

法沙原を以し 名利を以てを以酒と

これと 慙愧の念を以て

○ 奇功を術以て 譽を要し 兎暴を逞しと 威を示

多 殊を戦國の人を状あり 文詞を先しと 其

象風非 格律を潤のふ 小を以て 自矜を誘

り 道學を外しと 名を多し 利を以て 下 李世文

人の流あり 一向に身を染め 故を以て 世を希ひ

露を以て 子孫の福を以て 念しと 道教の心

忠孝を以て 古今小人の陋俗あり

○ 執勤就勞而無怨ハ 官士の職分也 是を以て

安任を要りいやくも芳々彼らと免れんや有り若
君を欺く潤を偷む絨より子等のや或は勞使を
自知し名利を貪り價償の紳民を位を争つ
小人也何と官士よりてや

○ 英徳國高須をききて松本村より山里の民 武吉馬
の娘三輩として額に肉角を生む 中指の太サ 夫が面を瘡出
来目も鼻もツマみぬく如く死せしむる如く或人
生けりて二輩として前より煩以肉角悪瘡
異なりして借籠るゝ人種有り如何なる
業報なり

○ 或曰筑紫の彦彦山を天狗魔術なりと如何乎曰彦

山三嶽権現を伊勢諾伊勢冊二巻及び天骨^忍也
崇神帝即位二年乙酉神祖を平らむりて皇族
を以て^等の^一九妙の人は是を崇敬せしむる者なり
以自彼山の彦彦相有六倍心の需も依る安樂院
の知雄比丘等記考る所の彦山権現君驗記一冊
室永六年の作 尊保己亥先謙少序作て平らせし神具
是心凡く^一諸の是を魔転をもん凡彦山幽谷
を以て氣勢^一の^一怪^一の^一毎^一年^一有^一也
庸皆^一物^一の^一境^一其^一考^一所^一の^一神^一を^一早^一行^一受
聞^一あり

○ 城南清涼山栄國寺の上人業多く極くあり

友よりわたりし故去の五月御籠りて一季より其
 作の内一本枯りてまきありし七月の日の逆さ
 ふ年一竹より一節芽を生し烈日もきりく次
 秋を越えて老ふ妙りいふく枝多るも老を衝て
 と手程好枝のひく葉の立よりてりく作の庚子
 月廿四日上人乃くして刃をきりて作籠りて
 の作も枯果法ひり濁もたると朽作の舟子詠清
 一舟逆しよりいへ枝葉の上は生ふ立口の又り
 まりく作の根も生きて此處もさるに詠清果れ
 りぬしむりし名ある人の杖の立りく枝葉生
 して今も常々作のちりりよをきりて人安あり疑

しく思ひ作りしうかり果ありて事侍りし今
 おもひ知し作り

○凡そ物の名目文字小凡そり計して其道の立入
 りるは此唱し多し例は法漏を便なりといふ事
 有職の多しを物り多しとくハ樂の名

- 皇帝破陣樂
- 團乱旋
- 万秋樂
- 央宮樂
- 秦王破陣樂
- 春庭樂
- 是ハ右方ノ樂ナリ
- 抜頭
- 新鳥蕪トノ字
- 古鳥蕪トノ字
- 退宿徳
- 長保樂
- 登天樂
- 是ハ左方ノ樂ナリ

此歌あまの河り其他公事及付懸るくの名目歌
 なく傳を男りて唱り事妙も大と申唐人の

瑞鳳を弟治二年二月九日法教堂より法皇宮
ありしに

○ 在り十四世の他阿上人 諱ハ屠 國々修行ありて

過し老 二月四日 城西横笛山光明寺より止留せらる 東國

少中四五九國紀伊伊勢ホニシククノリ 九日壹津の里に

行くと上人より之を尋ねて其年戊午の秋四十二世の

古跡 回國上人を古跡を祈る意海法澤 寺任和尚より各

らせしより 尊嚴沙唯秘法光母意場より其の

度より之を往く法海 信よりもかたりて之を尋ね

よき 予クを祖對抄刺吏藤喜貞 信州 方子金吾

校尉長弘芳樹院親氏公 徳川家法名 子原より

在り十四世尊親法親王の門徒となりて性純と

秘より昔の因縁も朽せ代々の貧者より相見

系をわたりも辨し其を上人より皇族二河白

たの公を

おぼせしとて予より法を立とて

いしあやうき道ありしを

上人より修行し遣迎の二寺より其もくし

しししししししししししし

六の字に法をいししししし

おんかたししししししし

と書てゆくししししし世付のししししし叔も流祖

一遍上人他阿吉水の大沙の言才證聖普慈國
師の門人性達上人の才子にして西山の法親を傳へ
りし一熊野権現の夢告よりして誦囉念佛の
祖他阿其始才他阿一遍上人伏見
帝の西應二年己丑撰州栗河の極樂淨土寺にて
始く六十万人決生往生の小冊を諸人に施すあり
今日よりして其を好く傳へ好く彼小冊を
安く芳流を流す簡文南無阿彌陀佛六十万人
とあり是を神勅の流算と稱し建治元年己酉月
昨熊野參詣の時神勅と云々

六字名号一遍法 十界依正一遍体

万行離念一遍證 人中上上妙法華

是證誠大指現より感得の四句の文有り此句の上の
字を取く六十万人とあり

光明寺今の院主光河也此句を撰く常にも相妙之云上光河也東部法華寺日輪寺亦也

其阿蘇國光河寺在也光河也前奥徳院光河碧道和尚の法券なり昔
今の物よりして作りしを以て日中禮讚の金鼓

聞えりし道場と出傳りて好く引奉りし経
よりして礼讚と云ふ詳すも性應渡を以て自助

者一化佛菩薩尋詳到入念傾公入宝蓮の句より
して悲喜と云ふ流系引奉りて名いの才更く

して悲喜と云ふ流系引奉りて名いの才更く

よりらぬ神もそはくし中宗親の心を後醍醐院

おろの好ふなすはたふ所のいふそ程

はくさうもそはくのおろ好ふそん

とよもせぬよりそまを思ひてそ淡侍なり

妹下しぬそはくも神もはくはくひあて

涙下しぬそはくも法は道しと

かろはくは河波の杜も好ひくそかこくそん不慮を

いふ山をんあはくそ森北より初て

はくそもあはくそはくはくそを

とほくもオウりの春の霞たも厚くそ松の葉は

昔よ似そるもあはくそはくそ福光信の侍そ

のり松はくそ淡侍なり

まかろの夢をくそはくそこのそ

うはくそはくそはくそはくそ

かんとすなりてはくそ

○ 諸國の社家吉田の命を奉りしは是なりとて
不終ト部家今是なりとて終りて先年關東の
命如左

社家位階之事 従先祖傳奏有らば勿論無
傳奏社家が吉田不及執奏能終は國吉田
社家ト社人位階は従吉田方職事なり
本國に終り無位是友の社人社家木吉田可為

皇國考也

延慶二年丁亥五月十七日

有之書因年九月廿五日所日代永井伊賀守より
武左衛門傳奏、本渡日因月廿七日西傳奏吉田家
系所、合せしむるはありき是を不知形に該社の
神人を一系より世にせしむる也

神人装束ありし風刺物衣を着せし事、神事
に似けなきに神事の所は淨衣を可用なり

○淨衣 神事之時不分若身著之

康永三年十一月廿二日着淨衣重出中門廊修禊
于時左大臣

應永廿九年十一月十二日春日祭上卿勸修寺
中納言自京都着淨衣立帽子

至德二年八月廿八日撰政并左大臣被參春

日社殿上人四人 右中將李尹朝臣 少納言長朝 臣
左少將賴冬 右兵衛佐長慶 着淨衣

至德二年八月廿七日近衛前博陸春日詣出諸
大夫二人各着淨衣

康永三年十一月廿二日參春日社 取要 諸大夫

光遠朝臣 光綱 光熙
光連 仲康 經賢 國定 五位一人也以上 六位 源康成 紀定業
源康信 紀久知

○三月廿七日 赤付 東部市井より失火し 中橋三丁目 救

手界と燒りて東慶山の寺より十餘坊冬上

○ 羈寓冬至 十一月廿二日

短晷不妨各里信 梅華三五含春寒

新香雖使鄉思動 休葉強為一笑歡

○ 山門掠額前大佛正實親世時の記念もして天

台大佛の影像を彩画し彼湯治味無量壽を

讚すより偈を奉く授けり庚子 十一月廿四日

大佛講より真を掛奉る慶讃供養しありたり

特地巍然睡 當年七作家

何言悟代化 真是古弥陀

九祥香を薦する偈

颺々朔風乍壑雪 禅園梅白別園春

台雲絕壁今天半 潤心當面月一輪

落月士峯の雪を妙に印を紫衣の濃なるも西方

引接の境思ふれいこけけけ 易姓而無人

の念をおもひつげ侍る

いふ山をん 帰るいふもあつはるも

いふ山をん 帰るいふもあつはるも

○ 佛成道

鎮骨幾年托石相 天香乍折玉肌寒

○ 人々歳暮の歌よきりり付

いふ山をん 帰るいふもあつはるも

いふ山をん 帰るいふもあつはるも

笈士のいづく家本を候か
松や木のこゝに水とくまゆ

○享保六年辛丑元旦

物育氣和春正融 江山蕩漾朝暉紅
知韶光不分高下 花信一傳万户通
化日由来擊壤歌 况魚初躍鳥聲和
春山期待恠花路 行處望新得意多
此春お故郷

立たけりおれりおれりの昇り下り

かゝあけを名々々々々々々々々々々々

○周防守貞幹老人居を知倦き多し多山お友々々

事をくふ海へせらさし時

前大僧正實観

こゝ移をもたしつゝらん山々々々

糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸

全

微風吹緑柳垂陰 花落琴躰烟樹深

無限山光怡鳥性 清音恰々晚還林

百々々々此方の枝がら々々々友々々々々

はつちの世ふ似ぬも々々山すま

○秋欲盡しりし顔

花をりりりりりりりりりりりりりり

水多々

うひろくしほりの花のやまを
海ももよほりしはくお母れく
あにあり何ふ鳥のかしらに

早梅

あやうくまひすうまうはひ
きくどりおくれ梅おころの花

水石契久

いへくむすうはく白石
お菊の法あをくぬかりれを

東風吹春水

うけ初ふ来能おまも凍ふくを

松かけしりふ岸の春の勢

○天満宮法樂の和歌

はくしう明の山を法流校も

かきてくかすを年代の松原

○享保六年正月十四日 院流會始

子日催典

法皇御製

少松のまはりしはくお母れも

くく初志初おまもおま

同月廿四日 内公宴

江上春望

御製

宇ら波をたるとふかすむすふははに
かせらむいづは梅もか所りん

○東起り梅のころのふかすむすふははに
のこくゆふふいづり古はふゆり梅いづ月あ
かすききまきふて風もきりては藤山吹の色は
まかすまらゆ光陰のいもまき愛徳の帯あふま
と文の中いづんおとろいれあふもたふおはゆの
ちくぬる遊川回流あくしてあふの流はあふ
白日すふ平あふはあすを待無き命も三月は
のあふまはとくは談るる時
まふゆはゆはゆのたのたしりかき

霞よりゆくとくはゆはゆの場

○駿州巨鰲山清見興國禪寺

崑山第一祖關聖禪師 聖一國師 嗣法 准開祖勅賜宝
珠護國禪師中真勅躬自是聖智禪師大輝
暹和尚

是ふんそぬの物地り 客殿ニ鶏の絵あり 君舟の筆とふ 海門眼遠

有渡の濱三保の清詠 一林して東西十七名 あふゆの古木あり 長寺花み盡今盛

鰲山衝翠玉梅魂 一簇紅雲照海門
紫府清香暖風裏 枝南枝北別乾坤

辛丑二月廿九日の口号其意後は凡そせしむるに記す

○卯月朔日の儀を

はまもあまの宮にきこしの祭を奉る

花をまきけしのかしらをたす

新張府にきこも去るに所をきくは

きくきくきくきくきく

月をまきけしのかしらをたす

きくきくきくきくきく

○孟夏初八佛誕之日浴五香水捨一瓣香偈

七蓮随歩 二龍酒湯

噴

淨法界身本無出沒

勿波湧波騰動三湘

○家より所崇大職冠大明神の肖像を土佐光起の

所國也皆彼 初君事をすつる法華經救行を

得くま像上より新氣を新又表宿をりて大切大

徳と謝し奉る相かき蘇花をんく信書にきく

すくすく

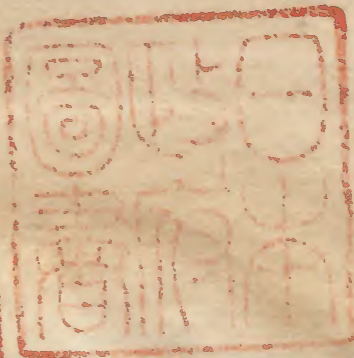
蘇きけいよきけいよきけいよ

くくくくくくくくくく

兩晉明王本地法身の法月早光穿ち抄以杜^社櫻

枯民の垂仁和光乎その長もあきくく照く

かきけいよきけいよきけいよ



てり月のすゝめありあきけき
こけけきありあきの川水

○此春春日社法樂と書物紙を今と勤をきり
かすの山かきむ光もみちありあり
めくろたけけりふ程かありあり

重能

けりけきをむくくくくくく
藤の末葉け包やきり

けりけきをむくくくくくく
けりけきをむくくくくくく



